

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

探偵はBARにいる

2011年・日本映画
配給/東映
125分

2011 (平成23) 年9月23日鑑賞

梅田ブルグ7

Data

監督：橋本一
原作：東直己『バーにかかってきた電話』（ハヤカワ文庫刊）
出演：大泉洋／松田龍平／小雪／西田敏行／田口トモロヲ／波岡一喜／有蘭芳記／武井棕／街田しおん／竹下景子／石橋蓮司／本宮泰風／松重豊／中村育二／高嶋政伸

👁️👁️ みどころ

(私立) 探偵など絶滅人種かと思っていたが、札幌・ススキノのBARには、今なお昔気質の“俺”がいた！弁護士と違って何の資格もない探偵の業務はハードだが、電話の声に美人の匂いをかぎとれば、たとえ火の中、水の中・・・？

ストーリー展開はややくしく、解明点は多いが、ウェディングドレス姿の小雪がクライマックスで展開する『キル・ビル』並みのアクション(?)に注目！シリーズ化は喜ばしいが、さて「このコンビ」は『悪名』シリーズの「あのコンビ」を凌駕できる？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■状況設定も古風なら、“俺”のキャラも古風？■□■

本作は、92年に『探偵はバーにいる』でデビューした札幌生まれでススキノを根城に(?)活躍する作家・東直己の、『ススキノ探偵シリーズ』を映画化したもの。かつて一世を風靡した勝新太郎、田宮二郎の『悪名』シリーズが大阪を舞台にしていたのと同じように、本作の舞台は札幌のススキノだ。私はある公式行事で3年の間毎年秋に札幌や小樽へ2泊3日の旅行をし、2連チャンのゴルフと夜のまちを満喫したことがあるが、さすが「日本三大歓楽街」と呼ばれるだけあって、ススキノの魅力は大変なものだった。

大泉洋演じる本作の主人公である私立探偵の“俺”は事務所を持たず、夜な夜な通うBAR“ケラーオオハタ”で酒を飲みながら、BARの黒電話を通じて仕事の依頼を受けるというスタイルを徹底させている。そんな状況設定も古風だが、『悪名』シリーズ時代の朝吉親分ならまだしも、今時ケータイを持たない主義という俺のキャラもいかにも古風。

■□■探偵は大変！弁護士でよかったと実感！■□■

昔は明智小五郎や金田一耕助など有名かつ有能な探偵がたくさんいたが、その正式名称は「私立」探偵。つまり、何の資格もないまま勝手に探偵と名乗っているだけの職業だから、司法試験合格者に与えられる弁護士の資格とは大違い。もともと、昨今弁護士は依頼者の獲得に大いに苦勞しているらしいから、その点では探偵と同じかもしれないが、大きく違うのは弁護士の主たる活動舞台は法廷であり、電話での交渉と書類づくりの事務作業がほとんどだということ。それに対して探偵は、刑事と同じように現場へ足を運び、関係者から直接事情を聞いたり証拠を集めなければならないから大変。バッジをつけている私たち弁護士は、依頼者はもちろん相手方にも「事務所に来てくれ」と言えるが、探偵はたとえ火の中、水の中だとわかっていてもそこに飛び込んでいかなければならない。そう考えると、探偵は肉体的にも精神的にもタフでなくっちゃ。こりゃ大変！自分は弁護士でよかったと実感！

本作冒頭、一面真っ白な雪の草原の中からもくもくと頭をもたげてくる“俺”のシーンが登場する。何とか這い上がってこられたから良かったものの、悪くすりゃ、こりゃ生き埋めのまま御仏に？

■□■この相棒のキャラは、あの相棒とは正反対！■□■

『悪名』シリーズで朝吉親分の相棒をつとめた、田宮二郎演ずる貞は英語ペラペラ(?)で頭の回転もケンカの開始も早いのが取り柄だった。しかし、本作で俺の相棒となる松田龍平演ずる高田は、今日的時代状況を反映してかその正反対！いくらグータラでも、北大農学部の「助手」だというからそれなりに頭はいいのだろうし、空手道場の師範代だというからその格闘能力は折り紙つきだが、いつも「北海道開拓おかき」を食べ、俺の救出にいつも遅れてくるその雰囲気は実にもっさりしている。しかも、その愛用する車「高田号」は時々エンジンがかからなくなったりするから、肝心の時に大丈夫？

それはともかく、本作はめでたくシリーズ化することが決定したらしいから、探偵と共に相棒のキャラを磨くことが大切。朝吉と貞のコンビによる『悪名』シリーズが第16作まで続いたのは、それぞれのストーリーの面白さに加えて、突出した2人のキャラとその組み合わせの妙にあったことは明らかだ。さて、本作のシリーズ化は何作まで？

■□■電話の主は美人？それとも？■□■

俺の探偵としての血が騒いだのは、BARの黒電話にかかってきたコンドウキョウコと名乗る女性からの「ミナミという弁護士に、去年の2月5日、カトウはどこにいたか？」とだけ聞いてくれという奇妙な依頼。弁護士でも探偵でも何らかの依頼を受任する時は、依頼者との面談はもちろんその依頼の目的や獲得目標をきちんと聞きとり、逆に事件の見

通しや費用負担などをきちんと説明すべきは当然。ところが、俺は電話の主から美人の匂いを嗅ぎ取ったため、それ以上何も聞かずに言われたとおりの行動をとったらしいから、そりゃ探偵倫理に反するのでは？

本作に登場する南弁護士（中村育二）は相当の悪徳弁護士だし、俺を拉致した男（高嶋政伸）は北栄会花岡組の筋金入りのヤクザ。さらにニセ右翼団体「則天道場」もかなり怪しそう。探偵の俺はコンドウキョウウコからの依頼を受けたことによって、①霧島グループの霧島敏夫社長撲殺事件、②近藤京子（街田しおん）の遺体が焼け跡から発見された「皆楽会館」放火事件、③「則天道場」に出入りしていた田口晃少年（武井暲）が江別の河原で遺体となって発見された死亡事件などの調査解明に奔走し、最後には岩淵恭輔（石橋蓮司）を会長とする大阪の「銀漢興産」の暗躍にも切り込んでいくわけだが、一介の私立探偵がこれだけのことをやり切るのは大変。それもこれも、きっかけは1本の電話からだ、本当に電話の声だけで、美人かどうかはわかるの？

■□■誰が見てもこの夫婦は不釣り合い！■□■

『ステキな金縛り』（11年）の幽霊役で、フル出演の熱演をみせた西田敏行が、本作では少ない出番ながらストーリーの鍵を握るキャラクターとして登場する。西田敏行演ずる霧島敏夫は霧島グループの総帥だが、創立20周年記念パーティーの帰り道、チンピラに絡まれている若い女性を助けようとして逆に暴行をうけ、撲殺されてしまうことに。年甲斐もなくいい格好をするからこんな目に遭ったのだが、いくら何でもこりゃちょっとやりすぎ？これはひょっとして、短足・寸胴のオッサンのくせに、八等身美人の若い沙織（小雪）を嫁にもらったことの報い？

夫の死後、超高級クラブのママにおさまっている沙織が、近いうちに大阪「銀漢興産」の会長の息子、岩淵貢（本宮泰風）と結婚式を挙げることになっていると聞いた俺が、そんな疑いを持ったのは当然だ。酒飲み仲間の記者、松尾（田口トモロヲ）に連れていかれた超高級クラブで沙織に一目惚れした俺だったが、霧島敏夫の殺害現場に花をたむけている沙織の真の姿（？）を知った時、さて俺の気持は？近藤京子が「皆楽会館」放火事件の被害者だと知った俺は、その母親・近藤百合子（竹下景子）からさらに詳しい事情を聞いていくと、何と百合子は霧島敏夫の別れた妻で近藤京子は霧島敏夫の実の娘であることが判明。何とも話はややこしいことに。すると、時々俺に電話してくるコンドウキョウウコと名乗る美人らしい女性は一体誰？それをめぐって、俺の推理は二転三転していくことに・・・

■□■クライマックスは、誰が主役に？■□■

梶芽衣子が歌って団塊世代の男たちにバカ受けした『怨み節』は、『女囚さそり』シリーズの主題歌だった。そして、その曲をモチーフとして、チャンバラ、ヤクザ、演歌が大好きというヘンなアメリカ人クエンティン・タランティーノ監督が映画化した「復讐モノ」

が『キル・ビル〜KILL BILL〜Vol. 1』(03年)、『シネマルーム3』131頁参照)と『キル・ビル〜KILL BILL〜Vol. 2 ザ・ラブ・ストーリー』(04年)、『シネマルーム4』164頁参照)。その映画冒頭はユマ・サーマン演ずるヒロイン「ザ・プライド」が堅気の男と結婚する晴れの舞台の席において、新郎新婦をはじめ結婚式の参加者全員が惨殺されるというショッキングなシーン。ウエディングドレス姿が最も印象的な映画はキャサリン・ロスが若き日のダスティン・ホフマンに腕を引っ張られながら、ウエディングドレス姿で教会から逃げ出した『卒業』(67年)だろうが、ウエディングドレス姿でスクリーン上に登場するのは女優だってうれしいはず。しかして、日本を代表する八頭身美人・小雪のウエディングドレスはいかに?もともと、沙織がウエディングドレスを着るお相手は「銀葉興産」の息子・岩淵貢だからちょっといただけないが、きっとそこには何かのカラクリがあるのでは・・・?

それくらいのことは本作を観ている私たち観客も感じ取ることができるが、どうもこの探偵にはそれがわかっていないらしい。したがって、一度は自分が惚れこんだにもかかわらず、岩淵貢と結婚すると聞いた俺は沙織に悪態をついていたが、そりゃちょっと考えが浅いのでは……。さあ、いよいよ沙織と岩淵貢との結婚披露宴が近づいてきた。しかして、このクライマックスにおける主役は誰に?真っ白なウエディングドレス姿の沙織の結末はいかに?

2011(平成23)年10月4日記

探偵も大変だが、弁護士はもっと大変?

1)『探偵はBARにいる』におけるハードで命をかけた探偵ぶりを見ていると、その大変さがよくわかる。しかし、昨今の法科大学院の統廃合や司法試験の合格率の低下さらに司法修習修了後の弁護士としての就職難などの状況を見れば、弁護士はもっと大変?

2)90年代半ば以降の「司法改革」の旗振り役を先導したのは、大阪弁護士会の著名弁護士である中坊公平。司法改革による①法科大学院の創設、②質の良い弁護士の大量増員、③「2割司法」を脱した法化社会の実現によって、弁護士はいきいきとその能力を発揮しかつ収入

も安定し、かつ社会的に尊敬される職業に。そんな思惑だったが、さて現実は何?

3)今や弁護士会はそんな嘆きの声でいっぱいだが、私は違う。大泉洋が演じた探偵は金のためではなく、専門職としてのプライドを持ち、依頼者と依頼事件のスジを選別し、何よりも人生意気に感じて探偵業を展開していたが、それが大切なことは弁護士も同じ。そして、私はそれを37年間実践してきたという自負心があるからだ。もともと、主人公“俺”は単に美女に弱かっただけ?という見方も。私も十分用心しなければ……。

2011(平成23)年11月8日記



『探偵はBARにいる』 2011年2月10日レンタル開始